

# 人類の無形文化遺産－組踊－

## 宮里祐光氏

岐阜女子大学

「沖縄おうらい」

### 目 次

1. 人類の無形文化遺産に登録
2. 重要無形文化財
3. 御冠船踊（うかんしんうどうい）
4. 組踊の創始者
5. 冊封関係
6. 能や歌舞伎の影響
7. 朝薫の五番
8. 歌舞劇としての組踊
9. 組踊の立方
10. 地謡（じうてー）
11. 組踊の規範
12. 二童敵討
13. 二童敵討の登場人物
14. 二童敵討－あらすじ
15. 三線の手事
16. 組踊の音楽
17. 能からの影響

## 1. 人類の無形文化遺産に登録

沖縄の組踊が、2010年11月16日にケニアのナイロビで開かれた国連教育科学文化機関（ユネスコ）の政府間委員会で、無形文化遺産保護条約に基づく「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」というリストに、記載、登録されることになりました。

沖縄県からはまったく初めてのことです。琉球芸能の精髓と言われる「組踊」が、世界に誇る遺産として認定されたことは、県民にとって大きな喜びでもあり、誇りでもあります。

念のため申し上げますと、表記では「組踊（くみおどり）」と書かれていますが、沖縄の方言では「お」は「う」に転じて発音することが多いのです。ですから、「くみうどうい」というように申しております。

## 2. 重要無形文化財

「組踊」は、沖縄が日本に復帰した1972年5月15日、その日に重要無形文化財に指定されました。実は昨年（2009年）、「琉球舞踊」が国の重要無形文化財に認定され、同時に重要無形文化財保持者として39の方が認定を受けられました。

この指定によってこれからの沖縄の伝統芸能が、皆さんにさらにご理解いただき、ますます発展していくものと考えています。

## 3. 御冠船踊（うかんしんうどうい）

ここで少し沖縄の宮廷芸能についてお話をさせていただきます。

沖縄の宮廷芸能は、中国から琉球王を任命するためにやってくる冊封使を歓待することで発展してきました。冊封使が乗ってくる船は王冠や王服など、中国の皇帝が琉球王に授ける品物を乗せてくるところから「御冠船」といったのです。

御冠船には、正副使をはじめ500人前後が乗ってきたことが分かっています。その人たちの滞在期間は4か月から8か月にも及びました。その間、琉球王府では冊封使をもてなすために豪華な宴を催したのです。

その冊封使を歓待する踊りとして、御冠船踊という沖縄の古典舞踊が盛んになりました。

## 4. 組踊の創始者

尚敬王の代 1718 年に玉城朝薫（たまぐすく ちょうくん）が冊封使を歓待する踊奉行に任命されました。

朝薫は翌年 1719 年に尚敬王冊封式典後の重陽（ちょうよう）の宴で初めて組踊を披露しました。演じられた組踊『二童敵討（にどうていちうち）』と『執心鐘入（しゅうしんかにいり）』は、従来の御冠船踊に一大変革をもたらしたのです。

このことから玉城朝薫が組踊の創始者と言われています。

## 5. 冊封関係

ここで琉球の歴史を振り返ってみることにしましょう。

琉球は 14 世紀中頃には南山、中山、北山という三つの王国が分立していました。

そもそも琉球と中国の交流は、1372 年、琉球国王中山王の察度（さつと）が、弟の泰期（たいき）を遣わし、中国へ進貢したのが始まりだといわれています。

中国の皇帝が琉球国王として認めることを冊封関係と申しませんが、周辺の諸国は中国へ貢ぎ物を持って行って中国への従属の関係を結ぶことで交易を行うことになります。中国の皇帝からは持って行った貢物よりもさらに多くの物をもらうことができたのです。

特に琉球は先陣を切って、中国との交易に力を尽くしました。これが琉球文化の形成に非常に貢献していくことになります。琉球は三山分立の時代を経て、1429 年には中山王尚巴志がこれらを統一します。第一尚氏王統が支配する琉球王国が成立しました。

ところが、1609 年、第二尚氏王統 7 代目の尚寧王の代に薩摩藩の侵攻を受けまして、徳川幕府の幕藩体制に組み込まれてまいります。その後は、中国と日本の二重支配の下に琉球が置かれることになります。

1879 年（明治 12 年）に琉球藩は廃止されて「沖縄県」となりました。日本の廃藩置県に遅れること 8 年です。尚巴志の統一 1429 年から 1879 年までですから、450 年間、琉球王国時代が維持されていたということになります。

## 6. 能や歌舞伎の影響

薩摩侵攻後、琉球の役人は、江戸や薩摩に行くために頻繁に大和を訪れます。旅の途中、各地で音楽や芸能を披露してまいります。文人とも交流を深め、能や歌舞伎などの、いわゆる大和芸能を鑑賞しています。

玉城朝薫も7回大和を訪れたという記録がありますけれども、やはり大和の芸能を鑑賞し、あるいは踊りなども披露したという記録が残されています。

大和文化に触れた彼らが、大和文化の素晴らしさに衝撃を受けたということは想像できますね。そのことがその後の琉球の芸能に新しい風を吹き込んだと言ってもいいでしょう。

このような歴史的な背景の下で、玉城朝薫は琉球古来の芸能や故事を基調にして、大和芸能や中国戯曲にヒントを得て組踊を創作しました。

## 7. 朝薫の五番

玉城朝薫は組踊を五題、創作しました。これは「朝薫の五番」とも言われていますけれども、今日演じていただく「二童敵討（にどうていちうち）」、これは読みにくいですね。例えば「にどうてきうち」と読むこともできますが、沖縄の方言としては「にどうていちうち」と読みます。

それから「執心鐘入（しゅうしんかにいり）」、「かねいり」と言いそうですね。「かにいり」。

「銘苺子（みかるしー）」は、「めかるしー」「めかるこ」とも言いそうですね、そうではないのですね。

「女物狂（うんなむぬぐるい）」は「おんな」と言いそうですねけれども、「お」が「う」に転じて発音しますから、「うんなむぬぐるい」と言います。

「孝行の巻（こうこうのまき）」、これは「孝行の」の「の」が「ぬ」になっています。これが朝薫の五番と言われているわけです。

この作品が朝薫の五番ということで、演じる人たちは、王府に勤務する士族とその子弟で、当時はすべて男性であったということです。組踊ができてからは、中国の使節が訪れるたびに、王府の士族により演じられてまいりまして、芸術的にも洗練されてきたのです。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

講演「人類の無形文化遺産－組踊－」 宮里祐光 氏

## 8. 歌舞劇としての組踊

組踊は、セリフ、歌（音楽、歌三線）、踊りを三つの要素とした歌舞劇であるということです。

セリフには独特の抑揚があります。歌三線（うたさんしん）は登場人物の心情を切々と歌い上げます。それに琉球舞踊が加わって、沖縄の伝統芸能が持つすべてが凝縮されているというのが、この組踊です。

## 9. 組踊の立方

組踊の立方（たちかた）についてお話します。組踊の立方は音楽に合わせて喜怒哀楽を踊りで表現することになりますが、立つ姿勢や歩み、視線や顔の向け方などの所作は、琉球王国の時代に磨き上げられた琉球古典舞踊の動きが基本となっています。

また、セリフに関しては、かつて沖縄で用いられた古い言葉です。現代の方言とはまた違う、いわゆる「おもろ」言葉であるとか、琉歌（りゅうか）の元になる言葉がふんだんに出てまいりまして、現代人にはなかなか分かりづらいところがあることも事実です。

それから、独特の抑揚で唱えられます。抑揚は男性役と女性役とではもちろん違いますし、さらに身分や年齢によっても決まっています。したがって組踊立方には、組踊の筋の展開であるとか、各役柄に対する深い理解と知識が必要とされまして、登場人物を的確に表現することが求められます。

## 10. 地謡（じうてー）

地謡（じうてー）。「じかた」と言う場合もありますけれども、「じうてー」と沖縄では言っております。

「組踊ちちがいちゅん」と、古老たちはよくおっしゃっていました。「ちちがいちゅん」というのは、「聴きに行く」という意味の方言です。この地謡が奏でる歌三線は、立方の心情を表現しています。

組踊は能の影響を受けたということは、よく知られているところではありますけれども、能にはもちろん三線はありませんね。そこが組踊の独創性と言われるゆえんかと思います。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

講演「人類の無形文化遺産－組踊－」 宮里祐光 氏

## 11. 組踊の規範

朝薫の五番は、「組踊は朝薫に始まり朝薫に終わる」と言われるほど完成度が高いもので、朝薫以降につくられたたくさんの組踊の規範になっていると言えます。

その後、踊奉行らによって創作された組踊は、現在 70 あまり確認されております。以上のように、組踊は沖縄で発達した特色ある伝統芸能として、芸能史の特に重要な位置を占めるということがあります

## 12. 二童敵討

本日は朝薫の五番のうち、「二童敵討」をご覧くださいこととなりますが、この組踊は「護佐丸敵討」とも申します。護佐丸というのは、もちろんご承知のように中城城のあるじですね。

1719 年の尚敬王冊封（さっぼう）、これは方言風に言いますと「さっふう」とも言います。でも一応、「さっぼう」とお読みします。その重陽の宴で初演されたというので、若干いろいろと誤解がありますけれども、「二童敵討」と「執心鐘入」の二つが、1719 年に初演されたということは残っております。

## 13. 二童敵討の登場人物

登場人物は、あまおへ（阿麻和利）、阿麻和利の表記は、この文類では「あまおへ」となっております。

そして供（一）、供（二）、供（三）があって、鶴丸（ちるまち）、亀千代（かじみゆう）、母。そして「きやうちやこ」とありまして、これは沖縄風には「ちょうちゃく」と読みます。

## 14. 二童敵討ーあらすじ

少しあらすじを申しますと、実は組踊の場合には幕が下りるということではなくて、情景が変わってきます。これは三線の音で情景が変わるシーンが分かってまいります。人の歩みが三線をとおして、そして同じ舞台の中で場面が変わってまいります。

あえて第1幕、第2幕、第3幕という言葉を使わせていただければ、幕そのものはないのですけれども場面的には、ここに簡単に書かれているものよりも少し詳しくお話しさせていただくと、琉球各地に群雄割拠していた時代ですね。

いわゆる古琉球の時代といえますか。首里城の第一尚氏王統がもちろん支配していた時代で、そのときは尚泰久の時代でもあるわけですが、勝連城の阿麻和利が天下取りの野望に燃えておりました。

しかし、首里を攻略するには、まずその前衛基地であるところの中城城を滅ぼすことが先であると考えたのですね。

それで中城城主の護佐丸が首里攻略の準備をしているという嘘偽りを告げて、まんまと首里をだまして討ち取ることに成功します。時間の関係で、ここに書かれているものを読ませていただきます。嘘偽りを言って攻め滅ぼさせたということですね。

さらに、近いうちに首里王府も滅ぼそうと企んでいるわけです。天下をほしいままにしている威厳を、阿麻和利の「七目付（ななみじち）」という荒事で表現します。

荒事というのは、実は歌舞伎から来ているのですが、荒っぽいしぐさ、たけだけしいしぐさですね。これがまず見ものだろうと思います。

阿麻和利の役をする人は、この「七目付」を非常に神経を使って表現して、これができるかどうかで阿麻和利の成功・不成功も決まるといように考えられている場面です。

阿麻和利は供を呼び出して、野遊びの準備を言いつけます。鶴松と亀千代、いわゆる二童ですね。二童は成長して、父の敵のあまおへを討つ機会を狙っているわけです。

ある年、阿麻和利が野遊びをすると聞いた二童は、父親の仇を討つ機会が訪れたと意を決するわけです。

(続) 14. 二童敵討ーあらすじ

二童は母親に敵を討つことの許しを得ます。そこで二童は、父親護佐丸の形見の守り刀を母親から譲り受け、母子は別れる。ここは切々と歌三線で表現していきますので、じっくりと歌三線を聴いていただければと思っております。

最後の場面になりますけれども、阿麻和利が野遊びのために、供3人を連れて登場してまいります。

阿麻和利一行が酒盛りをしているところに、鶴松と亀千代が守り刀を懐に忍ばせて、踊り子に身をやつして阿麻和利に近づいていきます。

二童は阿麻和利に所望されて踊ったり、酒のお酌をして阿麻和利を酔わせますが、阿麻和利は二童に褒美として、鶴松に団扇と太刀、亀千代には着物をあげます。

二童は丸腰になった阿麻和利のすきをうかがい、首尾よく父親護佐丸の仇を討つというのが筋でございます。



## 15. 三線の手事

画面上での資料はこれですが、少しだけ聴きどころを紹介しますと、組踊で男性が登場する場合、その身分によって、必ず歌を伴わない、いわゆる三線だけの「手事（ていぐとう）」を使うことが決まっています。

組踊りの手事は、按司（あじ）が出てくるのを按司手事といいます。それから若按司手事とか、大主（うふぬし）手事とか、マヌムン手事とか、いろいろありますね。ジャーン、ジャンジャンという音でマヌムンが出てまいります。

つまり、登場人物の登場によって曲が変わってまいります。そして、この「二童敵討」では、阿麻和利は按司（あじ）という最高の身分ですから、最も重厚で格調の高い按司手事で登場してまいります。同じ侍でも供の者は身分が低いですから、手事というのはありません。

## 16. 組踊の音楽

音楽については、組踊には各場面でふさわしい古典音楽が随所に使用されています。

古典音楽中の名曲である「仲村渠節（なかんかりぶし）」とか、「散山節（さんやまぶし）」とか「ヌファブシ」のなどの曲が使用されておりまして、古典音楽をじっくりと聴く機会にもなっているわけですね。

「散山節」は、親しい者が生き別れする場面、あるいは死んだと思った者と再開を果たす場面で使用される歌ということになってまいります。

## 17. 能からの影響

時間の関係で少しはしよりますけれども、要するに「二童敵討」は、確かに従来の「曾我兄弟の仇討ち」ものという、能からの影響も受けているということは、よく言われてきております。

日本文化の影響、中国の影響、そういったものを総合的に沖縄の文化として受け継がれてきたのが組踊なのです。

岐阜女子大学「沖縄おうらい」

講演「人類の無形文化遺産－組踊－」 宮里祐光 氏